

□開催日時:令和2年3月9日（月）14時～16時30分

□開催場所:駅北庁舎4階 第3会議室

□出席者（敬称略）

- ・委員:宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 山田健司 高尾和督 丹羽紀一 保母朋子 渡邊早百合
則武里香 可知徳仁 川西有潔 瀬瀬育恵
- ・事務局:田中次長 後藤正樹 松澤朗 井口裕子 長谷川京子 大山克則 成瀬広美

1 あいさつ

次長あいさつ

2 報告・検討内容

＜通常学級における支援について 等＞

委員

通常学級で支援を必要とする児童生徒は多く、同時に家庭支援を必要とする家庭も多いと感じています。特別支援コーディネーターの資質向上を目指して、関係機関との連携を大切にしていきたいと思います。

委員

指導者が障がい者理解をする必要があると思います。子どもたちの特性を、担任が知っているかどうかで、その子の支援につながるかが変わってきます。障がいごとの特徴に対する対応の仕方も知っておく必要があると思います。

委員

身体的な面で配慮の必要な生徒や、不登校傾向の生徒が多くなってきました。今年度は、こういった生徒を対象に個別的教育支援計画を作成し、情報を共有したり、支援を確実に引き継ぐことができるようにしたりしました。また、担任一人では支援を行っていくことが難しい場合もあるため、学年をはじめとしたチームで対応できるような体制作りを行いました。

委員

通常学級では、発達障がいの児童生徒への支援が重要であるとともに、保護者支援も必要になってきています。多くの場合は、特別支援教育コーディネーターが担任の先生と一緒に対応にあたっています。進路に関わる不安や悩みも抱えており、上級学校の見学等を行いながら、将来への見通しを考える機会を設けています。

委員

軽度の発達障がいの子どもが、通常学級での困り感が少なくなるように心がけています。そのため、支援員がキーパーソンとなり、声かけをしたり、評価をしたりする中で、子どもの支援につなげている。チームとして支援に当たることの大切さを感じています。

委員

保育園や幼稚園では、保育者が子どもたちに関わる姿を見て、友達との関わり方を学んでいます。また、子どもの特性に合わせて、支援の仕方を工夫することで、困り感を減らすことにつながっています。

委員

幼稚園や保育園から小学校に上がる時は、保護者の中にも不安感はあるものの、少しずつ減ってきているように感じます。一方で、小学校から中学校に上がる時は、中学校卒業後の進路も視野に入ってくるため、不安を感じる人が多いように思います。上級学校の学習や生活の情報が少なく、イメージがわからない場合も多いため、子どもにも、保護者にも具体的な情報提供を心がけることが大切だと感じました。

委員

特別支援学校のセンター的機能の相談件数としては、特別支援学級よりも通常学級からの依頼が多いです。また、通常学級における病弱児や難聴児等の支援についても、特性を考慮した専門的な支援を必要とする場合があります。児童生徒については、本人が特性を理解していないケースもあり、特に病弱教育については、病気の理解も大切な教育の一つであると考えています。相談機関として、地域の特別支援学校もあるが、さらに専門性の高いコアスクールが設置されているので、活用を検討していただくとよいと思います。

委員

個別の教育支援計画に加えて、ライフプランを作成しており、保護者と子どもの年齢から、生活の状況を考えるきっかけとしています。保護者の中には、自分の子どもの障がい理解が深まってないケースも見られます。学校に通っている期間で子どもの特性を理解すると同時に、可能性がまだまだあるということも認識していただくとよいと思います。

委員

保護者が自分の子どもの特性を理解し、受け止めているかが重要だと思います。また、先生たちにも、子どもの特性を知っていただき、適切な対応をとることが大切であると考えます。愛着障がいについては、本当に根が深く、発達障がいと愛着障がい等を併せもっている子どももいるため、先生たちだけの対応では難しく、関係機関を交えたチームで対応をしていく必要があると思います。子どもたちには自分の特性を理解し、得意な分野を活かすと同時に、苦手な分野はみんなで支援をしてほしいと言えるようになってほしいと願っています。

副委員長

学校の先生の力量や専門性向上という点では、2つの層で考えるとよいと思います。1つは、全ての先生が特別支援教育に関する理解を深めること、もう1つは特別支援教育に関わるミドルリーダーの専門性の向上を目指すことです。また、障害特性に応じた具体的な支援方法を学校間で共有し、蓄積することが大切であると考えます。また、バリアフリーの学校も限られていることから、設備の整っている学校にセンター的機能としての役割を担ってもらうことも検討するとよいと思います。引継ぎということも話題になっていましたが、小中一貫校の取組を参考にしながら、先生方の交流も今後話題にしていくとよいと思われます。

<特別支援教育コーディネーターリーダー会について 等>

委員

ケース会議や事例検討会を行うことで、私たちが指導している子どもたちが、今後どのような生活を送っていくのか、以前指導をした子どもたちが、どんな生活をしているのかが分かります。私たちが行っている支援や指導がどのように活かされているかを知る機会につながると思う。

委員

小学校に入学する子どもたちを幼稚園や保育園に見に行くと、先生たちがどのように支援をしているか、どれだけ子どもたちを大切にしているかがよく分かります。園内研等に参加をさせてもらうことができれば、幼稚園や保育園の支援や指導の方法を学ぶことができ、小学校での支援に活かすことができるのではないかと考えています。

委員

コーディネーターリーダー研は年々充実しています。一方で、メンバーの固定化が大きな課題であり、新しい方に加わってほしいと考えています。中学校区から1名をコーディネーターリーダーとして選出することが望ましいと考えます。研修会においては、知識面と校内外の連携の仕方、ケース検討会等を通じて、スキルアップを目指し、校区内の事例検討会を行うことで、校区内の連携につながることを希望しています。

委員

合理的配慮や合意形成の仕方を研修の1つに取り入れるとよいと思う。また、支援方法の掲載されているホームページ等の交流があると、各校の支援に結びつくと思います。

委員

研修のあり方として、見聞きして実際に足を運ぶことが大切であると思います。特別支援コーディネーターが、地域社会における福祉が、どのような状況なのか、どのような機関があるのかを知ることは大切なことだと思います。

委員

就労後の高い定着率の背景には、その子にあった仕事を探していることを心がけていることが考えられます。高校を卒業するとすぐに就労ということだけでなくもいいので、負担のないように自分に合った就労先を見つけられるように支援をしていくことが大切であると考えます。

委員

先を見通して支援の方向を考えていくことは重要だと思います。校区内の事例検討会も、先を見通すことができるので、とても役に立っています。

委員

連携をすることは、環境の違いを認識することだと考えます。連携の基盤となるのは個別の教育支援計画であり、中学校と高校の引き継ぎでも、必要な情報を的確に伝えることが大切だと思います。事例検討会やケース会議を開く際に、個別の教育支援計画が適切に作成されているかも合わせて話題にするとよいかと思います。

高等部入学後に、不適應を起こしてしまうケースも見られるため、中学校における進路指導の在り方も検討をしていただくようお願いします。

委員

親自身も学ぶ機会があるとよいと思います。子どもが小さい時は、親の不安も大きいため、学ぶ機会もありましたが、大きくなると親が学ぶ機会が少なくなったように感じます。

委員

コーディネーターの先生の負担の大きさを心配しています。校内の連携も上手くいかないケースも少なからずあると思うので、コーディネーターの先生をサポートするシステムや心のケアを構築する必要がある

と思います。

副委員長

幼保小中の連携については、共通の話題を中心に連携を進めていくことがよいでしょう。具体的には、合意形成の仕方を連携の柱にし、意見を交流することで、お互いの立場や考え方を理解することがよいかと思います。

学校や園においては、全ての先生に障がいを理解する気持ちや、子どもがどういったニーズをもっているのかをつかむことが第一歩となります。また、ケース検討会や事例検討会の持ち方や進め方も学び、校内で広めることができると特別支援教育の広がりにつながると思います。

<今後の多治見市のインクルーシブ教育について>

委員

今日の話題の中で、「笑顔」「楽しく」「明るく」という言葉が印象に残っており、この言葉が、本人や保護者、教職員みんなが目指す方向ではないかと考えます。一方で、人材育成や人材発掘が課題だと思います。特別支援教育の楽しさを広めるとともに、特別支援教育にふさわしい人材を見いだすことを心がけています。

委員

「目の前にいる子を、こう育てていきたい」という熱意や意欲を、自分自身がもつとともに、そういった思いをもつ職員を育てていく必要があると思います。

委員

どの子も自分の可能性を追求できる環境作りを心がけていきたいです。子どもの成長を喜ぶ一方で、周囲の子と比較をするようになってしまうことで、苦しさを感じる部分もあると思います。一人ひとりの成長の喜びに目を向けることを心がけていきたいです。

委員

この委員会に参加をさせてもらって、多くのことを学んで、学校で広めていきたいと思うことが多くありました。みんなが笑顔で学校に楽しく来ることができることを目指したいと改めて感じました。また、職員間でも楽しい話題を提供できるように心がけていきたいです。

委員

「これが苦手だからダメだ」ではなく、「これは苦手だが、こういうよさがある」ことを理解し、安心して過ごすことができるような環境作りを目指していききたいと思います。そして、本人が自信をもって過ごすことができるようになってほしいです。通級指導教室では、そういった力を付けることができると思うので、たくさん通級ができることを願っています。

委員

得意なことも苦手なこともあることが、その子の特性であると思います。誰もが、「できた」と感じるような支援を職員で考えていきたいです。

委員

コーディネーターとして、様々なケースに関わっていますが、笑顔を心がけて対応をしていきたいと思っています。また、多治見市の特別支援教育のシステムの良さを、他市にも広めていきたいと考えています。

特別支援学校に通っている多治見市の子どもたちも、多治見市の子ども一人であることを心に留めてください。また、多治見市での研修会等にも、職員の参加を呼びかけていただけたらうれしく思います。

委員

先生から、「偏見や思い込みをもたずに、ありのままの仲間を見るあなたの姿勢に、僕はたくさん学ぶことができました」と書かれた手紙をもらいました。家庭でも、そのように育ててきたので、先生も同様に見てくれていたことが、とても嬉しかったです。インクルーシブ教育は、その子のありのままを認め、受け入れていくことだと思うので、学校生活の中で、こういったことを学ぶことができたことは、いい経験をさせてもらえたと思っています。

委員

障害があっても、ありのままを社会で認めてもらうことを大切にしてきました。どんな障害があっても、受け入れてもらえる社会になってほしいと願っており、障害のある人たちの状況を社会に伝えていくことも重要なことだと考えています。そのためにも、インクルーシブ教育は重要であると考えています。

委員

障害の特性を活かして生活をし、仕事に従事している人は多くいます。こういった特性を活かした社会が、さらに広まっていくことを願っています。

副委員長

インクルーシブ教育は、特別支援教育のみで進んでいくものではないと考えます。地域とのつながりを大切にし、学校の教育全体が変わっていかないと、真のインクルーシブ教育になっていきません。また通常学級における授業作りやICT機器の活用を推進していくことも、特別支援教育の充実にもつながっていくと考えます。

子どもの立場で考えると、「自律」する心を、どのように育てていくかが課題になってきます。また、障害のあるなしだけでなく、多様性を尊重することも大切にし、多治見市ならではの「明るいインクルーシブ教育」を目指してほしいと思います。